

日本國際問題研究所中國部會編

中國共產黨史資料集

10

一九三九年九月—一九四一年十二月

勁草書房刊

中国共産党史資料集 第10巻

1974年9月20日 第1版第1刷発行

◎編者 日本国際問題研究所
中国部会
発行者 井村寿二
東京都文京区後楽2-23-15
印刷者 小林清
東京都港区三田5-12-1

発行所 東京都文京区 後楽2-23-15 株式会社 勁草書房
振替東京175253

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。

図書印刷・和田製本

Printed in Japan

3331-336003-1836

* 定価は外函に表示してあります。

凡例

(1) 本資料集は、ほぼ五・四運動前後から一九四五年、太平洋戦争が終るまでの中国共産党に関する基本的資料を翻訳採録したものである。選択の基準は、第一に中共中央の発出した重要資料およびコミンテルンの中国関係の重要資料、第二に中共中央に準ずるか、あるいはこれを代表すると思われる個人・団体・政府の名（たとえば、毛沢東・王明・共産主義青年団・辺区政府等）で出された資料、第三に中国共産党と深い係わり合いをもつ大衆的諸団体（たとえば、中華全国総工会等）の名で発表された資料の順である。

(2) 本資料集は全一二巻におよび、各巻毎に、採録した資料についての編注・資料・資料目録・年表・使用文献資料一覧表およびその解題・索引を、この順序に従って掲載した。資料の配列は執筆ないし発表年月日の順とし、年月日の不明のものについてはその資料が掲載された文献の発行日付に従うか、あるいは推定によった。

(3) 複数の原典をもつ資料に関しては、原則として最も早い時期に公表されたと思われるものを原文として採用した。掲載した資料は、今回新たに訳されたものが多いが、従来翻訳され

ていたものについてはこれを参照するか、あるいはその翻訳者の校閲を経て転載したものもある。選択したものうち、日本語訳のみあって原資料の見出し得ないものは、やむをえずそのまま採録した。ただし重要な資料ではあるが、わが国において今日はなほだ容易に日本語を見ることがのできるものについては、多くを掲載しなかった（たとえば『毛沢東選集』所収の資料など）。

(4) 紙数の制約により、重要と思われるかなりの資料を割愛せざるをえなかったが、本資料集作成の際に蒐集した各種の文献資料の中から重要と思われるものを選び巻末の資料目録に掲載したので、これを参照されたい。資料目録の記述は発表年月日、発出者あるいは著者、資料原名、所収原典の順とし、原典が複数の場合は、原則的にはすべて記した。ただし原典を蒐集しえなかったものについてのみ、後世編集された資料集から採り、その名を記した（たとえば、『赤匪反動文件彙編』、『革命文献』、『共匪禍国史料彙編』など）。また同様に原典を見出しえず日本語のみがあるものは、やむをえずそれからとった。発出年月日不明の場合は、明記しないまま、その前後を適宜判断

して配列した。

(5) 資料目録を利用する際の便宜のために、とくに重要と思われる事項、および事件を年表として上段に付した。また使用文献資料一覧表では、重要かつ初出のものについてのみ簡単な解題を付した。

(6) 使用文字は資料原名・所収原典名および原意を忠実に伝えるのに必要と思われる場合にのみ原文の通りとし、その他は新字体を用いた。

(7) 翻訳文は校閲して用語の統一等を行なったが、責任の所在は翻訳者にあるので、各資料の末尾に翻訳者名を記した。なお訳語は、原則として固有名詞は原語のままとし、その他は翻訳してある。訳文中、「」の部分は訳注あるいは編者注、ないしは訳者が言葉を補ったものである。

(8) 編注は、原則として採録資料の背景（日付、場所、発出

者、前後の状況など）および参考資料をあげるに止めてある。

(9) 本資料集の編集事業は、第一期に七年、第二期に三年の年月を要した。そのため、途中で編集者に若干の異動があった。各巻の扉裏の編集者一覧に多少の変動が生じた所以である。

(10) 本資料集には、なお不備な点や推蔽の不十分なところも多く、また誤りなきを期しがたい。読者各位の叱正を待つものである。

(11) 本巻は、国際的には、ドイツのポーランド侵入に始まり日米開戦によって文字通り世界大戦の局面が形成されるまでの時期、すなわち、一九三九年九月―一九四一年の時期を対象として、めまぐるしく展開する国際情勢のもと、国内的には新四軍事件を頂点として次第に深刻化する国共対立を抱えた中国共産党の、抗日民族統一戦線政策の展開をあとづける資料八七篇を収録した。

目次

資料1	毛沢東 当面の国際情勢と中国の抗戦について——『新華日報』記者に対する談話—— (一九三九年九月一日)	3
資料2	中国共産党晋察冀辺区党第二回代表大会 全辺区同胞に告げる書 (一九三九年九月三日)	9
資料3	中国共産党晋察冀辺区党第二回代表大会 辺区周辺の被占領地区同胞に告げる書 (一九三九年九月三日)	13
資料4	毛沢東・陳紹禹・秦邦憲・林祖涵・吳玉章・董必武・鄧穎超 これまでの参政会工作と当面の時局についての意見 (一九三九年九月八日)	16
資料5	毛沢東 第二次帝國主義戦争についての講演要綱 (一九三九年九月一四日)	25
資料6	毛沢東 『共産党人』発刊のことは (一九三九年一〇月四日)	36
資料7	中共中央 当面の情勢と党の任務についての決定 (一九三九年一〇月一〇日)	47
資料8	劉少奇 公開工作と秘密工作を論ず (一九三九年一〇月二〇日)	49
資料9	中共中央 大衆工作进行を深めることについての決定 (一九三九年十一月一日)	67
資料10	高崗 抗戦の新段階における陝甘寧辺区の任務 (一九三九年十一月一五日)	71
資料11	中共中央 知識人の吸収についての決定 (一九三九年十二月一日)	92
資料12	中国共産党陝甘寧辺区党第二回代表大会 辺区の全党員に告げる書 (一九三九年十二月一〇日)	95
資料13	中国共産党陝甘寧辺区党第二回代表大会 辺区の全民衆に告げる書 (一九三九年十二月一〇日)	102

資料14	中国共産党陝甘寧辺区党第二回代表大会 諸決議（一九三九年二月一〇日）	106
資料15	毛沢東 中国革命と中国共産党（一九三九年二月一五日）	116
資料16	朱徳・彭徳懷・林彪・賀竜・劉伯承・蕭勁光・林伯渠・高崗 銃口を国内に向けて 辺区に進攻することに反対する全国向け通電（一九三九年二月二五日）	140
資料17	王稼祥 中国共産党と革命戦争——『八路軍軍政雜誌』一周年を記念して—— （一九四〇年一月一五日）	143
資料18	毛沢東 新民主主義論（一九四〇年一月一五日）	169
資料19	中共中央 当面の時局と党の任務についての決定（一九四〇年二月二日）	207
資料20	毛沢東 対時段階の情勢とわれわれの任務——延安の民衆討汪擁蔣大会における演 説——（一九四〇年二月一日）	211
資料21	毛沢東・陳紹禹・林祖涵・呉玉章 中共参政員の国民参政会秘書処宛て電報 （一九四〇年二月三日）	222
資料22	延安各界憲政促進会宣言（一九四〇年二月二〇日）	224
資料23	陳伯達 当面の憲政運動の基本問題についての意見（一九四〇年三月八日）	228
資料24	朱徳・彭徳懷・葉挺・項英ら 汪精衛の打倒を訴える八路軍・新四軍の通電 （一九四〇年三月一五日）	241
資料25	毛沢東 抗日勢力を思いきって發展させ、反共頑迷派の攻勢に抵抗しよう （一九四〇年五月四日）	243

資料26	中共中央 当面の情勢と党の政策についての決定（一九四〇年七月七日）	248
資料27	中共中央 抗戦三周年記念に際しての時局に対する宣言（一九四〇年七月七日）	255
資料28	朱德 八路軍が華北の抗戦を堅持してきた三年間——延安の幹部会議における報告—— （一九四〇年七月頃）	259
資料29	洛甫（張聞天） 抗日民族統一戦線における極左化の危険（一九四〇年八月一日）	268
資料30	中共中央北方分局 晋察冀辺区の当面の施政綱領（一九四〇年八月一三日）	287
資料31	中共中央書記処 統一戦線工作の展開についての指示（一九四〇年八月一五日）	291
資料32	中共中央組織部 幹部審査の経験の総括（一九四〇年八月二〇日）	294
資料33	中共中央宣伝部 幹部の戦術教育を強化することについての指示（一九四〇年八月二四日）	298
資料34	彭德懷 「百团大戰」の偉大な意義（一九四〇年八月三一日）	300
資料35	中共中央書記処 共産党員が国民党支配地区内の下級公務員の地位を取得すること についての指示（一九四〇年九月一日）	306
資料36	『新中華報』社論 抗日根拠地工作を強化せよ（一九四〇年九月二日）	309
資料37	中共中央書記処 時局の全般的動向についての指示（一九四〇年九月二八日）	312
資料38	中共中央書記処 敵後方の大都市に工作を展開することについての指示（一九四〇年 九月頃）	316
資料39	中共中央統一戦線部 統一戦線部の組織と工作についての指示（一九四〇年十一月二日）	318
資料40	中共中央書記処 投降・分裂に反対し、時局の危機をたてなおすことについての指示	

資料41	朱徳・彭徳懷・葉挺・項英 大局を熟慮し民族滅亡の危機をたてなおすために何応 欽・白崇禧に宛てた返電（一九四〇年一月九日）	327
資料42	『新中華報』社論 蘇北事件の善後策をどう講じるか（一九四〇年一月二八日）	333
資料43	朱徳・彭徳懷 何応欽に対する質問の電報（一九四〇年一月二九日）	337
資料44	『新中華報』社論 八路軍経費の支給停止に抗議する（一九四〇年二月八日）	338
資料45	中共中央書記処 蘇北の政權ならびに民意機関の樹立についての指示（一九四〇年 二月一日）	341
資料46	『新中華報』社論 「日汪条約」に反対し、反汪運動を展開せよ（一九四〇年二月一五日）	343
資料47	毛沢東 政策を論ず（一九四〇年二月二五日）	349
資料48	中共中央スボークスマンの皖南事変についての談話（一九四一年一月一八日）	357
資料49	中共中央革命軍事委員会 皖南事変に際して發表した命令と談話（一九四一年一月）	361
資料50	陝甘寧辺区政府 各級参議会の改選ならびに選挙についての指示書簡（一九四一年一月三〇日）	367
資料51	「中国共産党陝甘寧」辺区中央局 「三三制」の選挙運動を徹底的に実施することに ついて各級党委員会に与える指示（一九四一年一月三〇日）	372
資料52	中共中央書記処 国民党の特務工作についての指示（一九四一年二月一〇日）	380
資料53	毛沢東・陳紹禹・秦邦憲・林祖涵・吳玉章・董必武・鄧穎超 国民参政会秘書処宛ての 公式書簡（一九四一年二月一五日）	382

資料54	董必武・鄧穎超 国民参政会秘書処宛ての公式書簡——付一二カ条の臨時解決方法—— (一九四一年三月二日).....	383
資料55	毛沢東・陳紹禹・秦邦憲・林伯渠・吳玉章・董必武・鄧穎超 今次参政会出席不能 の理由を重ねて参政会に回答する(一九四一年三月八日).....	384
資料56	毛沢東 『農村調査』序言(一九四一年三月一七日).....	386
資料57	中共中央北方局 晋冀豫辺区の当面の建設についての主張(一九四一年四月五日).....	390
資料58	中共中央 ソ日中立条約についての中国共産党の意見(一九四一年四月一六日).....	395
資料59	中国共産党陝甘寧辺区中央局 新施政綱領を公布することについての決定(一九四一年 四月三〇日).....	397
資料60	中国共産党陝甘寧辺区中央局 陝甘寧辺区施政綱領(一九四一年五月一日).....	398
資料61	中共中央書記処 党員の經濟・技術工作への参加についての決定(一九四一年五月一日).....	402
資料62	毛沢東 第二回目の反共の高まりを撃退したことについての総括(一九四一年五月八日).....	403
資料63	『解放日報』発刊のことば(一九四一年五月一六日).....	408
資料64	毛沢東 われわれの学習を改造せよ(一九四一年五月一九日).....	410
資料65	中共中央 当面の国内外情勢についての通知(一九四一年五月二五日).....	417
資料66	劉少奇 われわれは敵の後方で何をするのか——江蘇省塩城県第二回参議会におけ る演説——(一九四一年六月三日).....	419
資料67	周恩来 民族至上と国家至上(一九四一年六月一五日).....	440

資料 68	中共中央 反ファッシヨ国際統一戦線についての決定（一九四一年六月二三日）	453
資料 69	周恩来 独ソ戦争と反ファッシヨ闘争を論ず（一九四一年六月二八日）	454
資料 70	中共中央政治局 党性の強化についての決定（一九四一年七月一日）	462
資料 71	劉少奇 党内闘争を論ず（一九四一年七月二日）	465
資料 72	中共中央 抗戦四周年記念宣言（一九四一年七月七日）	499
資料 73	中共中央書記処 戦争の性質の問題についての指示（一九四一年七月二日）	504
資料 74	中共中央政治局 独ソ戦勃発に際しての通知（一九四一年七月一四日）	505
資料 75	晋冀魯豫辺区臨時参議會 晋冀魯豫辺区政府施政綱領（一九四一年七月二九日）	508
資料 76	中共中央 調査・研究についての決定（一九四一年八月一日）	513
資料 77	新華社 晋冀魯豫辺区臨時参議會、辺区施政方針を決定（一九四一年八月一〇日）	516
資料 78	中共中央 最近の国際事件についての声明（一九四一年八月一九日）	518
資料 79	毛沢東 陝甘寧辺区参議會における演説（一九四一年一月六日）	521
資料 80	林伯渠 陝甘寧辺区三年来的の工作概況——第二期陝甘寧辺区参議會に対する政府報告——（一九四一年一月八日）	525
資料 81	陝甘寧辺区政府 精兵簡政実行のため各県に宛てた指示書簡（一九四一年二月四日）	546
資料 82	『解放日報』社論 精兵簡政（一九四一年二月六日）	549
資料 83	『解放日報』社論 敵の後方における遊撃戦争の新たな任務（一九四一年二月七日）	552
資料 84	中共中央 太平洋戦争に際しての宣言（一九四一年二月九日）	555

目 次

資料 85	中共中央 太平洋反日統一戦線についての指示（一九四一年二月九日）	557
資料 86	中共中央政治局 延安の幹部学校についての決定（一九四一年二月一七日）	559
資料 87	『解放日報』社論 世界の戦局と太平洋戦争の特徴（一九四一年二月一八日）	563
資料目録		565
使用文献資料一覧表		
索引		

中國共產黨史資料集

第一〇卷

資料1 毛沢東

当面の国際情勢と中国の抗戦について——『新華日報』記者に対する談話——
(一九三九年九月一日)

「中共領袖毛澤東論目前國際形勢與中國抗戰——對本報駐延安記者談話」(『新華日報』一九三九年九月六日刊 二ページ)

〔編注〕一九三九年八月二三日、独ソ不可侵条約の締結、九月一日、ドイツ軍のポーランド侵入、九月三日、英仏の対独宣戦によって、第二次世界大戦が始まり、ヨーロッパを中心に国際情勢は大きく転換した。

この転換はアジアの国際情勢にも大きな影響を与え、中国共産党としてもこの情勢にどう対処するかが緊要な問題であり、共産党はこの時期に国際・国内情勢について多くの論文を発表している。

毛沢東自身この頃、国際・国内情勢を精力的に論じ、展望を与えている。本資料をはじめとして、九月一四日「第二次帝國主義戰爭講演提綱」(資料5)、さらに九月一六日「和中央社、掃蕩報、新民報三記者的談話」(『解放』第86期)などがあり、また違った角度からのものであるが、九月二八日「蘇聯利益和人類利益的一致」(『解放』第86期)も重要である。

本資料は、英独戦争開始直前のものであるが、毛沢東は、英仏と独伊の衝突が迫っており、第二次帝國主義戦争が第二段階にはいっ

たこと、また抗日戦争は戦略的対峙段階に達したことを指摘している。この談話での毛沢東の分析と評価が、新段階の情勢に対する中共の評価の基本になっており、これを定式化したのが資料5である。

関連資料としては、独ソ関係および独ソ不可侵条約について論評したものに、八月二四日の『新華日報』社論「蘇德關係的重要發展」、同八月二八日「蘇德訂約與遠東」がある。大戦関係についてはたくさんあるが、朱嘉美編『論第二次世界大戦』(一九三九年一月、上海)が主な論文を収めており、便利である。

(本紙延安四日電) 九月一日、本紙延安駐在記者が毛沢東同志を訪問し、当面の国際情勢と中国の抗戦に関する諸問題につき意見を求めたところ、毛同志の次のような回答を受けた。

記者の間 ソ独不可侵条約が突然結ばれましたが、それはどんな意義をもっていますか。

毛沢東の答 ソ独不可侵条約が結ばれたのは、ソ連の社会主義の力が増大し、ソ連共産党とソ連政府が平和政策を堅持した結果です。これが結ばれたのは偶然ではなく、偉大な政治的意義をもっています。この条約は、チェンバレン、ダラディエラの世界反動ブルジョアジーのソ独戦争挑発の陰謀を粉碎し、独伊日反共集団のソ連に対する包囲を打破し、この反共集団の反共産主義・反コミンテルンに関する欺瞞を暴露し、ソ・独両国間の平和を強化し、ソ連の社会主義建設の発展を保障しまし

た。東方においては、日本に打撃を与え、中国を援助し、中国の抗戦派の地位を強化し、中国の投降派に打撃を与え、そして、こうしたすべての意味からいって、全世界人民が自由と解放をかちとるのを助けるための基礎をすえました。これがソ独不可侵条約の全政治的意義であります。

問 人びとは、ソ独不可侵条約が英仏ソ交渉の決裂の結果だということが、なおはっきりとわからず、逆に、英仏ソ交渉の決裂がソ独条約締結の結果である、と考えています。英仏ソ交渉がなぜ成功しなかったのかを少し説明していただきたい。

答 それは、まったく英仏に誠意がなかったからです。近年来、世界の反動的ブルジョアジー、とりわけ英・仏の反動的ブルジョアジーは、独・伊・日のファシストどもの侵略に対し、一貫して反動的な政策、すなわちいわゆる不干渉政策なるものをもってきました。この政策の目的は、侵略戦争をかってにやらせて自分はそのから漁夫の利を得ようとするところにあるました。したがって、イギリス・フランスはソ連がこれまで提起してきた真の反侵略戦線結成の提案を根本から拒絶して、不干渉の立場をとり、ドイツ・イタリア・日本にかつてに侵略をやらせておいて、自分がかたわらに立ってながめてきたのです。その目的は、戦う双方とともに消耗させたいので、自分が干渉に乗り出すことにあるのです。この反動政策を遂行する過程で、かつて彼らは中国の半分を犠牲にして日本に与え、アビシ

ニアの全部、スペインの全部、オーストリアの全部、チェコの全部を犠牲にしてドイツ・イタリアに与えたのです。「今度の」この政策はソ連を犠牲にしようとするもので、このことは英仏ソ三国の交渉のなかですではっきりと暴露されました。この交渉は、四月一五日から八月二三日まで四ヵ月余にわたって行なわれ、ソ連側は忍耐に忍耐を重ねました。ところが、イギリス・フランスは終始一貫、平等互恵の原則に賛成せず、自分たちの安全を保障するようソ連に要求するばかりで、自分たちのほうはドイツの進撃に突破口を開いてやるため、ソ連の安全を保障せず、バルト海諸国の安全は保障できないとしましたし、またソ連の軍隊が侵略者と戦うためにポーランドを通過するのにも許さなかったのです。これが交渉決裂の根本の原因です。この期間中、ドイツは反ソ的立場を放棄し、いわゆる「防共協定」を実際上放棄することを望み、ソ連の国境の不可侵を認めたので、ソ独不可侵条約が成立したのです。世界反動派、まず第一に、イギリス・フランスの反動派のこのような不干渉政策こそ、「山上に坐して虎が相闘うのを観戦する」政策であり、まったく人をそこなつて己の利をはかる帝国主義的政策であり、それはチェンバレンの登場から始まり、昨年九月のミュンヘン協定にいたって頂点にたついたのであり、それゆえに今回の英仏ソ交渉は最終的に破産するにいたつたのであり、今後の時期は、英・仏と独・伊との二大帝国主義集団の直接衝突の局面となら